ルター新聞
Die Luther Zeitung
ルーテル学院大学（日本ルーテル神学校）ルター研究所ニュース・Nr. 71

世界の中のルター

A.Traini 画 “The Life of Martin Luther”
（アメリカで 500 年を記念して出版されたとびだす絵本）

宗教改革五〇〇年の節目にあたり、『エンキリディオン（小教理問答）』、『アウグスブルク信仰告白』、『「キリスト者の自由」を読む』といったルターと宗教改革の主要著作の刊行に本研究所はたずさわった。これらの著作から時代を越えて宗教改革の洞察を学び直す機会ともなった。ルターには「超時代」的側面がある。日本語でルターを研究するには言葉（文化）と時代（歴史）の相違を意識せずにはいられないし、翻訳と出版、そして歴史研究に精力を注いでこられた先達の積み重ねの上に今があることにも気づかされる。他方で、加速度的にキリスト教を取り巻く世界の様相は変化しており、神学もまたこれに直面している。ルターはもちろんのこと前例のない事例がいくつもある。その意味で「五〇〇年からの出発」はすでにはじまっているし、何がはじまっているのかを見極めること自体が常に神学的な課題でもある。

（み）

今号の内容

2面　世界の中のルター
3面　二〇一八年「ルターセミナー」報告
4面　シリーズ「人間ルター」⑨
　学問の人ルター
　ルターこぼれ話
　ルターとソクラテス
5面　シリーズ「ルター研究の名著」
　ペリカン『キリスト教の伝統』
　ルターのことば
6面　私のルター研究―教理問答
　切手に見るルター㉗「活版印刷術」
7面　書評
　オーバーマン『二つの宗教改革
　ルターとカルヴァン』
　小田部進一『ルターから今を考える』
8面　研究所ニュース

「五〇〇年からの出発」の課題
世界の中のルター　～アジアの視点～

所員　宮本　新

衝突し並存する世界像

―「神なき世界」と「神々の世界」―

世界に目を向けてみよう。二十世紀後半から教会と神学において対話という言葉が頻繁に用いられるようになった。自然発生的なものではなく、各地の宣教と神学の現場的な臨場感が背景にある。例えばインド系アメリカ人の神学者ポール・ラジャシェカー（Paul Rajashekar 合同ルーテル神学校教授）は長らくルーテル世界連盟で二つの世界像が衝突し、かつ並存してきた事実を指摘している。

一九六三年、ヘルシンキで開催されたルーテル世界連盟大会の主要トピックは現代社会における義認であった。世俗化の流れと人々の教会離れ、そして第二次世界大戦の荒廃の記憶と東欧の共産圏の動向などを踏まえ、「神なき世界」でいかに宣教するべきかが意識されていた。ところがこのような場面設定に対してインドの神学者P・ディビットは真っ向から否定的な見解を表明していた。なぜならアジアの諸教会で「神なき世界」は自明なことではなく、むしろ「神々の世界」こそが生きた現実であるからだと。今から五〇年前のことである。興味深いのはこの二つの世界像はいずれもこんにちまで持続しており、しかも欧米vsアジアといった単純な二項対立で解きほぐせないほどに浸透しているところにある。世俗化が取沙汰される地域でも同時に様々な宗教復興が見られ、依然として宗教の多元的な状況下にあるアジアの諸教会でも世俗化と世俗主義は当然のごとく強まっている。問題はどちらかが間違っていたことにあるのではない。そのいずれもが世界像として成立しており、問題があるとすれば一方しか認められない認識と観点にある。その後、世界のルーテル教会のレベルでは、他教派、他宗教、あるいは様々な世俗セクターと多面的で多元的に対話という接触と相互理解が積み重ねられてきている。その足跡はいずれか一方しか認められない思考と観点からの脱却をもくろんだ営為だったといえる。

ルター神学のロジック

そこでルター神学にアプローチする必然性とその仕方にどのようなものがあるのだろうか。現代社会の多元性と多面性。これに長らく取り組んできたラジャシェカーはルター神学のアプローチの仕方が肝心であると指摘する。ルターのテキストの限界性を踏まえつつもその神学的遺産から激変する環境世界に対応する強靭なロジックを掴み取っている。具体的にはソラとシムルの弁証法である。

ソラ（のみ）のロジックは「キリストのみ」「聖書のみ」「恵みのみ」など信仰世界の確信性を表明する。他方でシムル（同時性、並行性）は「律法と福音」、「神の右手と左手による統治」、「義人にして同時に罪人」、そして「啓示された神と隠されたる神」などこれまたルターとその神学に頻繁に見られるロジックである。これら相矛盾するかのような二つのロジックを「明瞭に区別はしても、決して分離はしない」ことをラジャシェカーは方法論として提示する。ソラを欠いたシムルの神学は自由で開放的ではあるが、他者にかかわる基盤（信仰）がぜい弱で終わりなき相対化へと帰結する。他方で、シムルなきソラの神学は、はっきりとしていて自信に満ちているようであるが、実際には異なる立場を認め理解することもなく、相手を同化あるいは排除するほかない循環論法に陥ると指摘する。神学は両者に転落する危険を察知しながら細い道を渡りきるような試みとなる。

かつて内村鑑三は隣人を「熊さん、八つぁん」と親しみを込めて表現したが、その隣人は今や近くにも遠くにも遍在し、その共生をいかにしてはかるかが課題となっている。「五〇〇年からの出発」はすでにはじまっている。

追記：ソラとシムルについては、本紙五〇号（2006.10）の、江口再起「ルター思想について（25）―ソラとシムル」をご参照ください。

H.S ベハム作「ルター」（16世紀の木版画）

二〇一八年・牧師のためのルター・セミナー報告（六月四～六日）

主題 〝五〇〇年からの出発〟

ルター研究所では毎年六月、「牧師のためのルター・セミナー」を開催している。今回の主題は「五〇〇年からの出発」。セミナーでは信徒の参加も大歓迎であるが、今年は初心に帰って特に牧師の参加を募った。というわけで牧師二二名、神学生三名、信徒五名総計三〇名の集いとなった（場所は、御殿場・東山荘）。

今回のセミナーでは従来にないいくつかの試みをした。ひとつは、所員による研究発題ばかりでなく、ルターやその他さまざまな研究を地道に積み上げている牧師、信徒による研究発表、また今春、牧師となった教職の神学校卒業論文の要旨の発表である。そして今回のセミナーのもう一つの特別な試みは夕食後のひと時、教会の抱える諸問題を全員で徹底討論したということである。

具体的に記しておこう。全体テーマに関して所員からの発題が二つ。「五〇〇年で問われたこと」（江口所長）、「ポスト五〇〇年とエキュメニズム」（石居所員）。また所員の研究発表として、「ルターと説教」（立山所員）、「オーバーマン著『二つの宗教改革～ルターとカルヴァン』をめぐって」（高井所員）、「アジアのエキュメニズム運動に学ぶ」（宮本所員）がなされた。

また所員以外では三つの研究発表がなされた。「ルターの信仰を問う」（末竹十大牧師）、ルターの義認理解についてである。「Why Lutherans sing what they sing（ルーテル教会のさんびの言葉）」（伊藤節彦牧師）、ルターの賛美歌および礼拝についての研究である。そして「バッハはなぜ《ロ短調ミサ曲》を作曲したのか」（加藤拓未、バッハ研究家・信徒）である。更に今春、牧師となった二名の神学校卒業論文要旨の発表があった。「教会式文の変遷」（野口和音牧師）、「ヴュルテンベルク公国の教会の職制」（多田哲牧師）である。

さて、夕食後のセッションは二晩連続で「教会の課題・徹底討論」が行われた。自由討論であるが、話の切掛けとしてまず四つの発題があった。世界ルーテル連盟が提起した聖書研究に関するレポートについて李明生牧師が、教会の社会活動をめぐって内藤新吾牧師が、今日のルーテル教会の問題点について竹田孝一牧師が、そして神学教育に関して石居神学校長が発題し、その後、自由に熱い話し合いがなされた。

（会場の御殿場・東山荘の黙想室より 富士をのぞむ）

とても盛り沢山なセミナーとなった。ルターを改めて学び、ルターを軸に信仰と神学を省みることのみならず、現実の教会の諸問題を世代や経験の違いを超えて語り合った、濃い熱いセミナーとなった。（え）

参加者の声

李　明生

今年度のルターセミナーは「五〇〇年からの出発」という主題のもと、開催されました。宗教改革五〇〇年という大きな節目の時を迎えた昨年、キリスト教界の内外から宗教改革の今日的な意味が問いかけられ、とくにルーテル教会に属する信徒も牧師も、改めて自らの信仰の足場をみつめ直し考える一年を過ごしました。そして宗教改革五〇一年目へと歩み出した今回のセミナーでは、それらの様々な問いかけを踏まえつつ、これからのルーテル教会そしてキリスト教会の課題とは何なのかを巡って、様々な発題・熱心な討議がなされました。

初日には江口所長より、宗教改革五〇〇年において問われたこと、そしてこれからの課題の整理について、続いて石居所員より「ポスト五〇〇年とエキュメニズム」についての発題がなされました。またセミナー二日目には、宗教改革五〇〇年を迎えた後、参加者の個々の文脈においてそれぞれの課題をどのように捉えていくのかという観点から、様々な研究発表が行われました。とくに多田哲氏と野口和音氏の二名の新任牧師からはそれぞれの神学校卒業論文を基に研究発表がなされましたが、力のこもった卒業論文にとても力づけられました。最終日となる三日目には、高井保雄所員による「オーバーマン『二つの改革』をめぐって」、宮本新所員による「アジアのエキュメニズム」の二つの研究発表が行われました。

また夜には、参加者がそれぞれの文脈の中で課題として取り組んでいる事柄について分かち合いの時間をもちました。現代社会がかかえている課題、ルーテル教会や神学校の問題、また教会と社会との関わり、そして自らの神学的・教会的課題について、夜おそくまで熱く、かつ自由にリラックスして話し合うことができました。

わたしは、宗教改革五〇〇年にあたってキリスト教会そしてルーテル教会に対して投げかけられた問いとは、今日、この世界が直面している諸問題にキリスト教会はどのように応答していくのかということが大事であると改めて感じました。この問いに向き合うことは、教会が自明としてきた事柄を、他者と共有できる言葉を用いて捉え直すことが今や不可欠となっていることを、今回のセミナーを通して考えさせられることとなりました。この充実したセミナーに感謝するとともに、来年の参加がとても楽しみです。

（田園調布教会牧師）

シリーズ「人間ルター」9

学問の人ルター

所員
立山　忠浩

中川浩之・画

ルターを「研究者」とか「学者」と称することがある。確かに彼は博士号を取得していたが、そのルター像を今日の感覚で描いていくならばずいぶん実像からかけ離れたものになるに違いない。

これは使徒パウロを描く場合にもつながることである。パウロはキリスト教の教理を構築した人物であるが、そこから研究者や学者のように理解されることがある。例えば彼の代表書である『ローマ書』を熟読するならば、難しい学術論文でも読んでいるかのような錯覚を起こし、その感覚でパウロ批判をしてしまうことがある。しかし的外れであろう。

ルターもしかり。彼の研究やその成果としての著書は、いわゆる学術論文を目的としているのではない。ルターは自分の内的な葛藤で苦悩し、その克服の道を捜し求め聖書の研究に没頭した。次第にルターは、パウロが自分と同じように苦闘しながら、そこから脱する契機になったことに、福音との出会いがあったことを知った。ゆえにルターの研究は業績を上げるためのものではなく、人はいかに生きるべきかという「実存的な問い」がまずあり、その答えを見出すための聖書の研究であった。ルターの研究者としての領域は多岐にわたり、家庭教育や音楽、貧困者の救済事業などの幅広い分野にまで及ぶ。しかしその中心は生涯に亘って聖書であったことを忘れてはならない。新約聖書の翻訳をヴァルトブルク城で成し遂げてから、一二年後には旧約聖書も完成させている。その後も度々訳の改訂を行い、創世記講義を行ったのも晩年である。聖書の研究者であった証しである。

真摯な「人生の求道者」ルター。真理の道を歩むために、聖書の探求者であり続けた人であった。この姿は私たちにも言えることではないだろうか。この世の学者や研究者ではないとしても、キリスト者は生涯にわたる人生の求道者であり、聖書の探求者だからである。

ソクラテス像
切り絵・竹田孝一

ルターこぼれ話

「ルターとソクラテス」

所長　江口　再起

ルターは大読書家であった。聖書や神学書ばかりでなく、イソップ童話やウェルギリウスの詩、そして何とソクラテスをも読んでいる。

ソクラテス。紀元前五世紀のギリシアの哲学者。哲学の祖、今や知らぬ人はいない。彼の哲学は一言でいえば、知恵イコール徳ということである。しかもその知恵は世の多くの知者が自慢しているようなものではなく、いかに自分に知恵がないかを自ら知っているという知恵である（「無知の知」）。

そのソクラテスについて、ルターは『ローマ書講義』の中で言及している。彼はこんなことを言っている。パウロのローマ書の要旨は、神ならぬ人間の知恵と義を破壊することである。確かに世の中には、見せかけでなく魂の奥底からでてきた徳と知恵を持つならばよい、と考える人もいる。多くの哲学者がそうである。特に自らの義しさや知恵を誇ることなく真摯に生きたソクラテスのような人もいる、とルターは彼に一目おく。とはいえ、ルターは厳しい。それでもなおかつ、人間は内心で自らの知恵と義を誇っていると言う。ルターはローマ書1章22節を引用する。「知恵ある者であると言いながら、愚かになった」。

ルターの教養のはば広さにも驚かされるが、彼の人間を見つめる目の厳しさにはもっと驚かされる。

ルター研究名著シリーズ

ヤロスラフ・ペリカン『キリスト教の伝統』全五巻

鈴木　浩訳　教文館（二〇〇六～二〇〇八年）

教会の公式の教えを「教理」と言いますが、この教理の歴史を辿る学問分野を「教理史」（ドイツ語では「教義史」という場合が多い）と呼びます。この分野での最高傑作は長い間、ドイツのアドルフ・フォン・ハルナックという人のものでした（*Dogmengeschichte*）。その後、一九六〇年代に入って、ドイツと比べて神学では「後進国」と見られていたアメリカに、それを乗り越えた著作が生まれました。それが、ペリカンの『キリスト教の伝統』（*The Christian Tradition*　全五巻）でした。

ペリカンというのは珍しい名前ですが、スロバキアからの移民の三代目で、祖父、父、本人そろって、ルーテル教会の牧師です。もっとも本人は、ルーテルの神学校と同時にカトリックの神学校も修了し、そのまま大学の教師になっているので、牧師の経験はないと思われます。英語版『ルター全集』の編集者であり、アメリカのルター研究の第一人者でした。徳善義和先生が、ドイツ留学からの帰国の際にアメリカでペリカンの研究室を訪ねられたことがあったそうです。ペリカンの著書の邦訳では、名著『ルターの聖書釈義』（聖文舎）がありましたが、残念ながら今は絶版になっています。

さて『キリスト教の伝統』の第四巻が『教会と教義の改革』と題された宗教改革とその前後の歴史を扱った重厚な著作です。歴史上の文書は、様々な言語で書かれているのですが、引用された文章は、すべてペリカンが新たに翻訳したものになっています。

すべての巻のすべての章には、冒頭にその章の内容を要約した短文が置かれていて、優れた要約になっています。ペリカンは全五巻の出版のために四〇年を費やしましたが、全五巻の原書をやはり全五巻で日本語訳として私は翻訳しましたが、長い年月が必要でした。それでも、わたしにとっては最高の学びの機会ともなりましたし、英語の文章を書く際のお手本にもなりました。

（所員　鈴木　浩）

ルターのことば

所員　石居　基夫

試練がなく、万事がうまくいき、順調に運びつつあるとき、
それこそが最も危険な試練の時ではないであろうか。

『善い行いについて』　1520年

わたしたちは、いつでも、そして特に困窮の中で、神に願い、祈り求めることがゆるされている。神は、わたしたちの弱さを知っておられ、ただ、神にのみ助けを求めるようにとわたしたちを励ましくださる。

ルターは、その人間の弱さと罪深さの深い自覚から、人間の努力や功績によっては救いは得られず、ただ信仰を通してのみ、人は救いを得ると教えている。

しかし、もちろんわたしたちに与えられる救いというのは、わたしたちが願い、期待する通りの答えを得るということばかりではない。いや、むしろわたしたちには神の救いは隠されているといった方がよいのかも知れない。その逆説的な視点は、ルターの宗教改革的信仰の特徴ということができるだろう。このことばも、まさにそういう信仰の逆説を語る。

試練といえば、わたしたちには悩みと苦しみ、悲しみが与えられるような体験のことだ。深い絶望が押し迫るような出来事。できることなら、そのような体験はご免被りたい。けれども、ルターはそうした試練がないことこそ、もっとも深い試練だというのである。

なぜかといえば、ルターにとっては、この試練のときこそ、神への信仰が導かれるときなのだ。わたしたちは自分の願いが叶う時に、神様がいてくださったと安心できると思うし、願いが叶わなければ、神などいないと言ってみたりする。けれども、そこにあるのは、自分中心の思いばかりだ。願いごとが叶った次の瞬間には、神のことなど忘れている。試練は、そうした自己中心的な思いが打ち砕かれ、むしろ、神の前に立ち、神に信頼するということの本当の意味を深く知っていく機会となる。

ルターにとって大切なことは、この信仰への確かな歩みを生きることなのだ。試練がないということこそ、わたしたちにその信仰への導きを得る機会を失うということになるのだ。

私のルター研究 ―教理問答

所員　高井保雄

私がルターを知ったのは、御多分に洩れず、教会での「小教理問答」の入門講座を通してであった。我ながら多少熱心に牧師に質問したりしていたが、この後に洗礼を受け、神学を学びたいと考え、神学校に入った。

神学校図書館の書架には、ルターの全著作（各巻が百科事典ほどの厚さのワイマール版全集一〇五巻）が並んでいる。余りに膨大で、これを学ぶのかと思うと途方に暮れた。

ところが、ルターがある手紙の中で、『奴隷意志論』と『教理問答』こそ自己の真正の書だと述べている事を知って、これは少なくとも『小教理問答』については研鑽を積まねばならぬ、という思いに至ったわけである。

それにしても、『小教理問答』の何処にルターがあんなに明確に言い切るほどの「自己の真正」の点があるのだろうか？

キリスト教界の代表的教理問答は三つある。一つはカトリックのそれ（カ）、第二はルターのそれ（ル）、第三は改革派のそれ（改）である。これら三つの内、「カ」と「改」は使徒信条から問答を始める。「ル」のみ、極めて特異だが、十戒から問答を開始している。

論述のトップに最も重要な主題を提示するルターの叙述スタイルを考えると、既にここにルターの教理問答の独自なあり方が存在すると言わねばならない。ルターは言う「十戒を完全に理解している者は聖書全体に精通している。…」（大教理問答序文）と。

ルターは直接的に神の臨在を捉え得たまことに希有な人である。そのことは、彼の小教理の第一戒の答「私達は神を、何にもまして、恐れ、愛し、信頼すべきです」の文言にも現れている。ルターがその波瀾万丈の生涯を通じて得た神観を端的に語るなら、それは正に「神を恐れ、愛し、そして全き信頼に至った」という臨在体験の外にはない。私も可能ならその道を歩み、遂にその時には「顔と顔を合わせて見」（コリント第一、12・13）たい、と思うのである。

500年を記念して、ルター研究所訳で『エンキリディオン（小教理問答）』（リトン刊）が出版されています。

切手に見るルター ㉗
活版印刷術

大分・別府・日田教会牧師　野村陽一

活版印刷術は、諸説ある中でその発明者はヨハン・グーテンベルクとされている。マインツ出身で貨幣鋳造等の金属加工師だったグーテンベルクは、金属活字と農業用プレス機を組み合わせた画期的な印刷術を生み出し、従来の写本や木版印刷に比べて大量かつスピーディーな印刷が可能になった。時期は15世紀半ばと考えられ、1455年には有名な「42行聖書」が印刷された。

この活版印刷術は瞬く間に全ヨーロッパに広がり、宗教改革運動にも多大な影響を与えることになる。ルネサンスの原典回帰の賜物ともいうべきヘブライ語旧約聖書やギリシャ語新約聖書の印刷出版は、のちにルターによる聖書ドイツ語翻訳につながる。宗教改革運動の発火点となる「95か条の提題」は30万枚も印刷された。ルターの著作の出版はこの印刷術なしには不可能だっただろう。当時、ヴィッテンベルクにも活版印刷を手がける印刷屋があった。ハンス・ルフトという。ルター訳聖書の中表紙には、「ハンス・ルフトによる印刷」と堂々と記されている。

紹介するのは、1970年旧東ドイツで発行、著名人シリーズ中のグーテンベルクの肖像を描いたもの。もう一点は1954年旧西ドイツで発行、グーテンベルク聖書500年記念の切手で、グーテンベルク印刷機を使う15世紀の印刷者を描く。

書　評

『二つの宗教改革　ルターとカルヴァン』　H.A. オーバーマン 著　（教文館、2017 年）

本書の目的は、「最初のプロテスタントにして、ドイツの預言者（歴史上最も偉大な自由の代弁者）へと変貌させられた」ルターの偶像を、「歴史的改革者修道士マルティン」の実像へと取り戻し、宗教改革を、その諸思想と諸運動が終始格闘した文化的、社会的環境に置き直すことを通して、宗教改革研究の新たな道筋を指し示すことにある。

題名に「二つの宗教改革」とあるように、著者は近代プロテスタンティズムの始まりをジャン・カルヴァンに見出すことによって、宗教改革の地平を極めて広く「14 世紀に始まり 18 世紀にようやく終わったヨーロッパ全体にわたる聖性と改革の追究」から捉え直そうとする。つまり、宗教改革に始まるプロテスタンティズムは、少なくともルターとカルヴァンの両者の貢献を視野に入れないと、全体が正しく捉えられないのである。

著者はナチスに抵抗したオランダ改革派の牧師家庭の子として生まれた。アンネ・フランクと同様に、彼の母親はナチスに捕らわれ、拘束されてしまう。この少年期の体験が著者のその後の人生を決定する。彼は渡米の後、ドイツにおける宗教改革研究の牙城と言うべきチュービンゲン大学で教える旁ら、ドイツの学会に支配的な愛国主義的な英雄としてのルター研究を越えなければならないことを痛感する。その後再渡米し、癌による死を前にして渾身の著作を残したものが本書である。本書は、宗教改革の研究に、文字通り画期を示す著作となった。

所員　**高井　保雄**

『ルターから今を考える』　小田部進一 著　（日本キリスト教団出版局、2016 年）

副題に「宗教改革 500 年の記憶と想起」とあるように、著者は現代に生きる私たちにとって 500 年前の歴史的な出来事の一つとなっている宗教改革を、そこに至る背景も含めて資料を参照しながら丁寧に描き出すことで、まさに宗教改革の記憶と想起を行なっている。読み進めていくうちに、当時の様子がありありと想い起こされる。ただ、決して宗教改革史の流れを書き出しただけではなく、著者の神学的立場や現代的な視点も随所に表されており、表題の通り、現代にとって宗教改革とは何であるかを問う内容になっている。その問いとは、プロテスタント主義とは何かということである。ルターによって宗教改革が始まって以降、プロテスタント主義は私たちの重要なアイデンティティとなってきたが、プロテスタント主義が旧来の退廃したカトリック教会を超克する開明的な進歩の象徴のように扱われてきた従来の見方に対し、本書は宗教改革がカトリック的伝統から起こったことを重要な視点として指摘している。それはカトリック的伝統の全き受容でもなく、否定でもなく、捉え直しであった。本書は私たちにプロテスタント主義を現代の視点から捉え直すという意欲的な問いかけをしている。

日本福音ルーテル日吉教会　牧師　**多田　　哲**

研究所ニュース

●牧師のためのルターセミナー

六月四～六日、御殿場の東山荘で「牧師のためのルター・セミナー」が開かれました。テーマは「五百年からの出発」。三十名参加。詳しくは三面をご覧ください。

●ルター研究所の公開講座

二〇一八年度前期は江口所長による「ルター概論」が開かれ、ルターの生涯と神学、また後世への影響などについての学びがなされました。

後期は「ルターとルーテル教会」の講座が開かれます。石居・宮本の両所員が担当します。

●最近の所員会

ルター研究所では原則毎月一回、所員会が開かれています。研究所の行事企画等、事務的な打ち合わせの他、所員による研究発表などの共同研究も行っています。昨二〇一七年の宗教改革五百年には、国内外でルターや宗教改革をめぐる多くの研究書や論文が発表されました。それらを改めて学んでいくことにしていますが、現在、日本ルター学会の紀要（「ルターと宗教改革」）七号の論文集『ルターの主要著作を読む』の検討をすすめています。参加者歓迎。

●秋の講演会

ルター研究所では、毎年秋に講演会を開催しています。今年は十一月十八日（日）午後二時より日本福音ルーテル大森教会で開かれます。講演は小田部進一「宗教改革から五百年後の人間の自由と不安と希望」です。小田部先生（玉川大学教授）は一昨年『ルターから今を考える』を出版されましたが（本紙七面の「書評」をごらんください）、また他方で社会問題をも視野に収めつつ研究されている気鋭のルター研究者です。乞うご期待。また講演の他、ルターの「神はわがやぐら」をめぐるミニ演奏とレクチャーを計画しています（演奏・高橋のぞみ、解説・加藤拓未）。どうぞご参加ください。

●「ルター研究（別冊五号）」発刊

研究所では、所員その他の研究の成果を紀要雑誌「ルター研究」に発表しています。別冊を含め今まで十四巻刊行してきました。特に二〇一三年より「宗教改革五〇〇周年とわたしたち」と題して別冊シリーズとして五巻計画し、すでに四巻出版してきましたが、今秋、この別冊シリーズの最終巻として「別冊五号」を刊行します。

内容は、立山「今日的課題としての〝ルターと聖書〟」、高井「ルターの生涯の一風景」、江口「ルターの脱構築」、石居「ルターにおける律法と福音の重層的構造」、宮本「ルターと十字架の神学」等の所員の論考です。またその他に昨年の「ルター・セミナー」で講演していただいた真下弥生先生（宗教改革と美術）、加藤拓未先生（宗教改革と音楽）の論考も掲載されます。更に、二〇一六年、ルーテル世界連盟が発表したルター派の聖書研究の指針とも言うべき文書「はじめに言があった―ルター派共同体における聖書」の翻訳を収録します（安田真由子訳、李明生解説）。十月末発刊予定。

●予　告

二〇一九年度の「牧師のためのルターセミナー」は、マホロバマインツ三浦で、二〇一九年五月二十七～二十九日に開催されます（日程が、例年より一週間早めですので、ご注意ください）。

●献金のお願い

ルター研究所は、日本福音ルーテル教会からの支援金（一〇〇万円）と皆さんのご支援（およそ一五〇万円）で成り立っています。同封されている後援会献金の振込用紙にある「後援会献金（ルター研）」という欄にご記入いただければ、そのまま「賛助会費」として計上されます。皆さんのご理解とご支援をよろしくお願いいたします。

（所長　江口　再起）

秋の講演会のポスター

ルーテル学院・ルター研究所
三鷹市大沢三―一〇―二〇
電話　〇四二―三一―四六一一
発行責任：江口　再起（所　長）
e-mail：Luther-studies@luther.ac.jp